
狡兎死して、良狗煮られる。

マサカンズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狡兎死して、良狗煮られる。

【Nコード】

N6582E

【作者名】

マサカンス

【あらすじ】

漢の創始者劉邦、だが彼の働きだけではあるはずがない。”韓信”という若武者の活躍とその最後の物語である。

第一話（前書き）

みなさんヨロシクね。

第一話

十序章十

「狡兔死して 良狗煮られる」、今まで大事にされた獵犬も、兔が居なくなると煮て喰われる。

西暦前259年、趙に人質となっていた莊襄王の子として都、邯鄲で生まれた者がいた。

後に始皇帝と称されたエイ政である。

その父（第30代）が崩御され、若干13才で第31代秦王となつたエイ政は、母（趙太后）や、権臣 呂不韋等の傀儡王であつたが蔚繚や李斯等の忠節な権謀術師の活躍で実権を取り戻すと、前221年 当時の国（群雄）を全て滅ぼし史上初の天下統一を成し遂げた。

因みに蔚繚とは

「孫子」、

「呉子」、に勝るとも劣らない兵法書の一つ、

「蔚繚子」の著者である。

李斯は政治経済、土木建築の最高責任者であつた。

右に李斯、左に蔚繚、この完璧な布陣は今日でも理想ではないだろうか？

前置きが少し長くなったが、本編の主役は始皇帝ではない、韓信という、武者であるが始皇帝の時代が深く関わるので前途した。

十 項羽と劉邦十

項羽、楚（今の香港より北東の辺り）の名門豪族である。
劉邦、沛県（今の中国の真ん中より南東側）出身でその日暮らしの
乞食の親分である。

劉邦は人物掌握が上手く、中国でも数少ない平民上がりの皇帝とな
った大人物である。（あの有名な漢帝国の創始者だよ）

一方、項羽は劉邦と覇権を争うが最後の最後で大惨敗を喫し、この
世の人物ではなくなる。

項羽はカリスマ性はあるが人物を信じ切れず、逆に劉邦に離反され
たあげく、兵法家の検索をも疑い親族にまで離反された。

対極のこの二人・・・しかし劉邦の人物掌握もさることながら、
本編の主演 韓信の働きは劉邦その人以上である事は確かである。

十 韓信の股くぐり十

韓信、彼は淮陰わいいんという地方にいた。

青年時代は一定した職に就かず、使う事もない剣をぶら下げて野良
仕事をしている老婆に飯をたかつていた。

韓信

「婆さん、いつもスマンなあ。」

老婆

「・・・。」

韓信

「・・・？」

韓信

「．．おらが出世したらこの恩は必ず返すからサア、明日もたのむよ！？」

老婆

「ヘッ！今日も明日もくいっぱぐれが、出世だつて！？ だいたい毎日ソコで剣磨いてるだけじゃあねえの！！チッ！！」

韓信

「．．．」

韓信

「オラは今、あんたをこの剣で刺し殺す事だつて出来るんだ！でもそんな事をする為に磨いてるんじゃないやネエ。誰かがオラを必要とするその時まででは使わネエ！！！」

韓信はこの時少し酔っていた。

勿論泣け無しの銭で買った酒だ、三日目だというのに半分以上は残ってた。元々酒はあまり強くないのだろう．．。

翌朝 彼は淮陰市場に飯を漁りに出かけた。

この市場は小規模ながら、”モノ”はある、まがい物の酒、払い下げの 干し肉、しかし韓信の興味は女と、ソコで募集する反始皇帝連合（反秦帝国）の入軍志望者集めだった。

商人

「いらっしゃい！いらっしゃい！！」

ザワザワ・ザワザワ

楚役人

「始皇帝が死んだ今、秦帝国に何の力があるのか！今こそ！かつての楚王国を復権するべき！！立ち上がるべきだ！」

韓信

「（馬鹿な！ほざいてろ！オラは楚なんかどうでもイイ。それに秦帝国にはまだ李斯がいるじゃねえか。あの人恐えんだから！）」

犬肉商人

「オイッ！韓信！！」

韓信

「！？」

犬肉商人

「まーた剣ぶら下げやがって。使った事もネエくせに、俺を刺してみろ！」

仲間

「ヒャーッハッ！！旦那、コイツにそんな芸当無理だっつーの！」

韓信

「．．．。」

犬肉商人

「ヘッ！ならよッ。俺様の下くぐんな！！ならよ、酒奢ってやるよ！！アアーン！？」

韓信

「（今はコイツらに勝てっこネエ！）」

犬肉商人

「ンンっ」

ガサガサッ

韓信

「・・・」

仲間

「ヒャー！旦那！くぐったぜー！？」

犬肉商人

「ハッハッハッ！オメエ恥知らずカァー！？マァイヤ、ほらよ、酒だ！でもソレいつのだったけ？？ガッハッハ！じゃあな股くぐりの韓様〜！」

やじ馬

「イヤーね、あの人。韓信っていうの？恥知らずな人・・・。」

韓信

「・・・」

結局この日、韓信は志願兵になれずまたいつもの老婆の仕事場へと引き返した。

韓信と劉邦はどこか似ているようで似てない。

乞食まではほぼ同じ様であるが、いかんせん韓信には人物掌握の術

が欠けていたのかもしれない。

彼はただ貪欲に自信の場を求めていた様にさえ感じる。

劉邦が人物掌握に長けていたのに対して、彼は自分を試す為に後に劉邦の幕下に参加した・・・。

いわばお互いの利益がソコで一致したともいえる。

補足ではあるが劉邦は韓信や長良（ちやうじやうりやう）Ⅱ「劉邦軍参謀」他、面々等はほぼ好き勝手にさせている。これが後に大問題に発展するのだが・・・。

つづく

第一話（後書き）

今日もありがとう。

第2話（前書き）

また書きました

第2話

十 韓信の検索十

数日後、韓信はなんとか楚軍に入隊することができ、最下級ともいうべき雑兵だがしばしば軍団長や師団長へ、自らの意見、作戦等を上奏した。

韓信

「何故だ？もう何回も上奏したのに、まだ北上するのか？」

雑兵

「ケツ！北へ真っ直ぐ攻めたほうが最短距離だろうが！！それに俺達楚軍は強い！飯は食べるし、女は掠り放題だ！」

韓信

「（馬鹿な野郎だ。このまま北上したら、章邯^{しやうかん}率いる秦軍最強軍団と戦う事になる。勝っても被害損害は多大、その僅かな軍勢で咸陽（かんよう。秦国の都）を制圧出来るはずがない）」

軍団長

「韓信という奴はいるか！？」

韓信

「オラ、い、いや私ですが」

軍団長

「項伯^{けいはく}様が呼ばれておる、すぐに行け。」

韓信

「へい。」

韓信は自分の検索を見してくれたのか期待しながら項伯の下へ向かった。

韓信

「失礼しやす！韓信、只今着きやした。」

項伯

「おおお、入れ入れ。」

以外に気さくな雰囲気にも思えた。

項伯とは、項羽の叔父である。あの癩癩玉で天下無双を誇る甥とはまるで正反対であった。

勿論例え項羽であっても叔父には、どこと無く頭が上がらない少年時代を共に過ごした師に近い様な者であった。

項伯からすればその優越感があり、今日の人物を形成したともいえる。

項伯

「君が韓信か？」

韓信

「？へ、へい？」

項伯

「ふん、やたら検索してくるので机上の虫とやらかと思ったが、案外背が高くて頑丈そうじゃのう。」

韓信

「へい、もったいない言葉でやす。おつ母が聞いたら喜びやす。」

項伯

「ンン。御母堂は達者かな？」

韓信

「3年前に死にやした。」

項伯

「なんと。辛かったのう。所であの検索はそちが考えたのか。」

韓信

「へい。項羽様はなんて言いやしたか？」

この時の韓信はまるで言葉使いがなっていない。しかし項伯はこの頭の良さそうな大男がどこか滑稽に見えた。

項伯

「いや籍（せき。項羽の字）にはまだ見せる訳にはイカン。あやつは受け入れないだろうしな。」

韓信

「そつでやすか。」

項伯

「実は范増（はんぞう。項羽軍団一の軍師）もワシに同じ事を言ってきたのう、そこにそなたのコノ検索じゃ、目に止まったわい。もうちとワシに詳しく話さんか？」

韓信

「では・・・。」

韓信は項伯に北上する際のメリット・デメリットを事細かく説明した。

項伯は驚いた、范増のソレと全くと言っていい程 韓信の検索は一致していた。

范増は熟練された軍師で最高機密の軍略を外部に漏らすはずもない、項伯は韓信を自分の傍らに置こうとしたが彼はなぜか拒んだ。

韓信からすれば項伯など所詮項羽のお目付け役、それどころか自分が項羽をコントロールしていると勘違いした輩なのである。

この様な者の側にいるといつか自分に火の粉が降り注ぐと思った。

十 咸陽炎上十

一方、劉邦軍は項羽軍団が北を攻めあぐねている隙に、迂回して抵抗勢力を吸収しつつ、ついに秦国の都咸陽に入城した。

劉邦

「やっぱり咸陽は立派な所じゃ。女の質が諸国とはまるで違うわい。」

蕭何しょうか

「劉邦様、私は祝宴の用意を整えますので失礼させていただきます。」

劉邦

「ああそうか、お前は相変わらず真面目じゃのう。これだけの女がおるのに見向きもせん！好きにしろ。」

蕭何

「では失礼します。」

この関係が面白い。

劉邦と蕭何は同郷ではあるが、立場は逆であつた。

劉邦はコソ泥の親分、蕭何は役人である。

コソ泥の親分である劉邦の貴重な情報を蕭何はうまく活用していた。さすがにコソ関係はマズカッタらしく、蕭何は劉邦を亭長（ていちよう。最下級役人）に取り立てた。

しかし秦の始皇帝が死ぬと各地で蜂起する者が相次ぎ、立場が悪くなつた蕭何らは人気の高い劉邦をその町の主として、自らはその右腕として、今日に至っている。

実に頭が切れる。

逆に劉邦はほぼ何もしていないといつてイイ。

彼はいつのまにか名参謀達を支配下に置いていた、まさに天性の人物掌握術を身に着けている。

運がイイとも取れる。

十韓信、共に漢中へ十

間もなく章邯軍を吸収した項羽軍団が咸陽に程近い鴻門こうもんに迫ると、立場の低い劉邦は僅かの側近だけを率い項羽に謁見し、自軍は悪魔でも項羽軍団より下であり咸陽で貴軍を迎える準備を整えていた事を説明した。

それまで激怒していた項羽は劉邦のへり下つた態度に気分を直し告げた。

項羽

「あいわかった。劉邦よ、お前は感心な奴じゃ。このままその足で漢中へ布陣し賊を征伐してくれ、その暁には漢中の王を名乗るが良
い。」

劉邦

「ははー。」

これを見た范増は項羽の下へ駆け寄り耳打ちした。

范増

「項羽様、あやつを漢中に入れてはなりません。いつそ成敗なされ。」

項羽

「あ？こんな奴をやつたら俺様の面子が立たんわ。コイツはこのまま利用した方がイイ。」

范増

「そうでございますか、ならば兵数を限定し、しかも志願者のみと
しましょう。如何でございますか？」

項羽

「そこらへんは任せる。」

厳しい条件の中、劉邦は漢中へ逃げる様に向かった。

韓信

「志願者かあ。范増様もなかなかやるなー。それを甘んじて受けた劉邦様はもつとやるなー！」

雑兵

「そうかあ？漢中^{ちゅうげん}つていやあ中原とは別世界、あんなとこ俺は嫌だね！」

韓信

「好きにすればイイさ。オラ、いや俺は志願するよ。」

韓信は志願し、項羽軍団から劉邦軍へ乗り換えた。

この時項伯は彼を捜したが見付からずついに諦めた。

韓信

「聞くところによると劉邦様はよく意見を聞く人物らしい。それに取り巻きの連中もたいした人物だろう、間違いない。」

韓信は険しい山道を一生懸命行軍し、脱落する事もなくようやく漢中へ入った。

この後項羽は咸陽の宮殿を焼き、墓陵を暴き返す等人々の反感をかった。

この項羽の卑劣な行動は咸陽の民達から猛烈な反感を買い、後に劉邦軍団が東進を行った際、大義名分の一つとなった。

つづく

第2話（後書き）

ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6582e/>

狡兎死して、良狗煮られる。

2010年10月20日19時07分発行